

令和 4 年 6 月 23 日現在

機関番号：14601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2021

課題番号：21K19948

研究課題名（和文）近代日本の知識人によるイスラーム理解の研究

研究課題名（英文）A Study of Understanding Islam by Japanese Intellectuals in Modern Japan

研究代表者

小村 明子（KOMURA, Akiko）

奈良教育大学・国際交流留学センター・特任講師

研究者番号：10909229

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：近代における日本人の外来宗教の理解・受容過程を明らかにすることを目的として、近代日本の知識人たちがイスラームをいかに知って理解してきたのかを、戦前の書籍や雑誌などの刊行物を収集して検証し、記載内容を読み込んで分析した。また、それぞれの知識人たちが記した内容を比較した。この研究によって、明治時代初期から大正時代にかけての知識人のイスラーム理解の多くはヨーロッパのイスラーム研究文献資料の翻訳によるものであり、また直接ムスリムから聞き知ったものではないこと、ただし戦間期以降は直接ムスリムからイスラームの情報を得て、さらに彼ら自身の信仰や宗教観などを頼りに理解へ結びつけていったことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本人が海外の宗教文化をどのように理解していくのか、とりわけ宗教概念という難しい考えをいかに理解していくのか、その道程を知ることができた。特に戦間期以降の知識人がムスリムと出会ってイスラームを知るという直接体験によるものだけでなく、自らの人生における宗教体験や信奉する宗教、あるいはこれまでに獲得した宗教の知識を利用しながら、イスラームという宗教を理解してきたことは、将来の日本における海外の宗教文化をどのように知り理解していくのか、特に異文化理解において重要な視点となるであろう。その点において本研究は社会的意義があるといえる。

研究成果の概要（英文）：With the aim of clarifying the process of Japanese people's understanding and reception of foreign religions in modern times, the researcher analyzed how modern Japanese intellectuals came to know and understand Islam by collecting and reviewing prewar books, magazines, and other publications and deciphering their descriptions. The researcher also compared the contents of the writings of each of these intellectuals. Through this research, it was found that the understanding of Islam by most intellectuals from the early Meiji to Taisho periods was based on translations of European literature in Islamic studies, not on direct knowledge of Islam from Muslims. However, it was also made clear that they have obtained information on Islam directly from Muslims since the interwar period and have relied on their own beliefs and religious views to understand Islam.

研究分野：人文学

キーワード：日本のイスラーム 日本人ムスリム イスラーム 異文化理解 宗教人類学

1. 研究開始当初の背景

本研究は、戦前期の日本人にとって外来宗教となるイスラームの理解と受容に関する研究である。また、この視点において本研究は先駆的研究である。本研究に先立つ研究として、研究代表者が行った2つの研究がある。一つはイスラームの信仰の基軸となる「六信五行」の「五行」の一つである「信仰告白(シャハーダ)」の説明についての研究である。もう一つは戦前期および1970年代後半から1980年代前半にかけてみられた「日本的イスラーム」についての研究である。本研究はこの2つの研究を基盤としている。

本研究では、戦前期の複数の知識人が神道あるいは仏教とイスラームを比較していること、とりわけ、当時の日本人改宗者たちがイスラームを理解し受容するにあたって、神道の神々とイスラームの唯一神とを同一視し、または仏教用語や仏教思想を使用していたことに着目している。すなわち、イスラームと神道あるいは仏教の教義を比較してイスラームを解説することは、日本人による外来宗教の理解・受容を容易にするための方法であるといえるのかということの研究の主眼にしている。その上で、イスラームという外来宗教の受容過程について本研究を進めていった。

2. 研究の目的

本研究では、近代における日本の知識人や研究者によるイスラームについての著述や解説から、イスラーム理解に使用された神道の神々や仏教の用語を精査し、当時の日本の知識人や日本人改宗ムスリムがイスラームをどのように考えていたかを分析することにある。それによって、近代における日本人の外来宗教の理解および受容過程を明らかにすることを目的としている。

3. 研究の方法

まず戦前に刊行された著作物で、イスラームに関するものを収集していった。特に、中国東北部の植民地政策に従事していた日本人の著述については、丹念に調べていった。当時刊行されていた『日本及日本人』『大亜細亜』『回教』といったアジア諸地域を中心とした世界の動向や中国大陸の地域事情などを紹介した雑誌記事や、戦前の日本人改宗ムスリムによる雑誌への投稿文、回教(イスラーム)政策従事者の論文などを精査していった。

日本人ムスリムの著述については本研究での前段階の研究において既に入手しているが、本研究においては再度入念に調べていった。さらに、イスラームについて記載がある著作物で再版されているものがあつた場合は再版分も含めて精査していった。

また、当時の宗教学者の文献の中には仏教用語を多用してイスラームを解説している著述が複数あることから仏教用語についても調査していった。具体的に、当時の知識人たちが神道や仏教で使用されている用語をどの文脈で使用しているのかを、同時代の仏教学者や神道学者の文献などをもとに当時の宗教観を調査することで明らかにしていった。

さらに、親が戦前に改宗したという第二世代にあたる年配の日本人ムスリムにインタビューを行い、また所蔵されている戦前の貴重な書籍を拝借して文献調査にあたった。

4. 研究成果

本研究によって以下のことがわかった。まず、明治時代初期から大正時代にかけての知識人のイスラーム理解の多くは、ヨーロッパの文献資料によるものであり、それらを翻訳して日本語文献として刊行することによって、イスラームの知識を世間に広めていったことがわかった。またイスラームの信ずるべきことや義務行為を規定した六信五行などの宗教用語や概念の説明においては、仏教の知識に依るものであることがわかった。例えば、イスラームでは唯一神アッラーへの賛美のための祈りを意味するアラビア語の「サラート」を「礼拝」と訳す。だが、それを「祈祷」と訳すなど、仏教の概念や用語と考えられる言葉を多用してイスラームを説明していることもわかった。

ただし戦間期以降はその様相が少しずつ変化していることも本研究で知り得たことである。1920年代以降の文献資料を読み込んでいくと、日本の知識人たちは直接ムスリムからイスラームの情報を得て、その上で著者自身の持つ宗教観や、神道や仏教などの他宗教の信仰経験を頼りにしてイスラームの理解へ結びつけていったことがわかった。また、仏教用語など他宗教のどの言葉を多用しているのかによって著者のイスラーム理解の道程を垣間見ることができた。例えば、特にいくつかの著述において見られたことであるが、この時期においても、イスラームの信徒が行うべき義務の一つである礼拝の記述については、「祈祷」という言葉を多用していた。それら著述の多くは、加持祈祷における礼拝行為や、修行としての礼拝などの仏教的な考えに基づいて論じていることがわかった。なお、この礼拝の記述における分析結果は、本研究の成果の一部として、仏教学者およびキリスト教学者にもご登壇頂いて奈良教育大学主催の「ならやまオー

ブンセミナー公開講座 世界宗教おける『礼拝』：仏教・キリスト教・イスラームにおける祈りのありかたについて考える」の中で公表した。また、同公開講座のプロシーディングを刊行して視覚的にも発表した。

先述の通り、本研究に先立つ研究として「日本的イスラーム」の研究を行っている。その「日本的イスラーム」についても本研究で改めて分析を行った。この「日本的イスラーム」については、戦前期の日本人改宗者である田中逸平が彼の著述の中で「大乘イスラーム」という言葉を使用して説明していることがわかっている。この「大乘イスラーム」は文字通り日本仏教から援用している。そこで本研究では、田中逸平の著述も含めた戦前期の「日本的イスラーム」の記述において、どのような宗教観に基づいて著述しているのかについて改めて分析した。その結果、神道の神々とイスラームの唯一神とを同一視するなど、仏教のみならず神道についても触れて日本的イスラームを説明していることがわかった。

本研究において、研究代表者のこれまでの研究を促進するだけでなく、近代日本から現在までの日本におけるイスラーム史を再構築することができた。またこれは、日本におけるイスラームおよび日本人ムスリムを研究する新たな研究基盤を構築することともなったと言える。さらに、その分析をもとに、日本人によるイスラーム受容の研究を行ったことは、日本人の外来宗教の受容の一例として、宗教研究のさらなる発展に寄与できたと言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>公開講座（シンポジウム形式）開催 「奈良教育大学 ならやまオープンセミナー公開講座 世界宗教における「祈り」：仏教・キリスト教・イスラームにおける祈りのありかたについて考える」</p> <p>プロシーディング発行 「奈良教育大学 ならやまオープンセミナー公開講座 世界宗教における「祈り」：仏教・キリスト教・イスラームにおける祈りのありかたについて考える」</p> <p>「異文化理解を研究する 日本のイスラームを例として」（E-book：奈良教育大学出版会） https://www.nara-edu.ac.jp/PRESS/ebook/book045.html</p>
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------